



陶芸で描く「原爆」 今、叫びを感じて

小児科医

福山桂子 さん



福山桂子さんは、1993年から2001年にかけて、全障研道支部会報にて「オランダ見聞記」、「オランダツアー報告」、「出生前診断を考える」を連載。全障研道支部30周年の1999年、障害児教育研究の先達、木村謙二先生から道支部長を引き継ぎ、2020年から顧問。

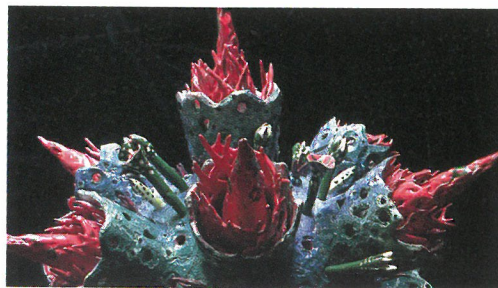
1992年、学習障害への問題関心から一年間オランダに留学。そこで得た知見やネットワークをベースに全障研道支部第一次オランダツアー（1996年）、同第二次オランダツアー（1997年）が実現。先掲連載を含め、障害者のくらし・教育・労働・芸術・性のあり方についての新しい視点を発信。福山さんは、全障研での学びをとおして、「人間、子どもを部分で見ないで、トータルに見ることができるようになった」と語る。

唐津焼や有田焼で名高い佐賀で生まれた福山さんは、陶芸好きの家族に囲まれていた。広島に移った福山さんは、小4で障害者医療の道を進む原点となる脳性麻痺の級友と出会う。傍らには被爆者である叔母さんたちもいた。

福山さんは、これまで、核兵器の話題を避けてきた。というのも、高校時代のディベートで、自身が唱える「非武装論」が論破され、ロンドン大学留学中に、写真などで被爆の惨状を訴えるものの、連合国側の友人たち

の、戦争早期終結などを理由とする〈原爆投下正当化論〉を論破できなかったからだ。

ところが、二年前、原爆の後遺症で叔母の淑子さんが亡くなり、怒りが再燃。家族の物語という視座から陶芸展「広島、1945.8.6」を制作。私小説的モチーフだったが、鑑賞者やメディアは、反戦・反核の優れた作品として評価。時あたかも核兵器禁止条約に背を向ける日本。身近な人へ訴えたい福山さんは、院内展示会を催し、さらに、今年11月には埼玉県丸木美術館で第5回個展「広島、1945.8.6」を開催。叫び、存在、エネルギーを感じ取ってほしい。（聞き手・二通論）



「(赤核) × (赤核) = 0」

作品はインターネットで鑑賞できる（右記QRコード）。11月5日から12日まで、埼玉県東松山市の丸木美術館で個展開催。（Tel.0493-22-3266）



ふくやま けいこ / 1999年から2019年まで全障研北海道支部長を務め、現在は顧問。広島大学とロンドン大学で学び、勤医協札幌病院、札幌市知的障害者更生相談所（手をつなぐ相談センターまあち）他の医師として活躍。